神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

『ドン・キホーテ』と愛の詩学：セルバンテスと「わたし」の共同創作

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-03-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Okamura, Víctor Isamu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1478

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

[博士論文審査の要旨]

本論文は,『ドン・キホーテ（Don Quijote)』を，作者セルバンテス（M. de Cervantes）だけでなく，読者によっても創造される文学作品と捉えて分析しようとする研究である。作者やその他の作品の紹介，対象作品のあらすじといった事柄は一切省略され，ただちに主題に入り，作品中のいくつかの章を重点的に取り上げる形式をとっている。

学位申請者は修士課程入学当初より『ドン・キホーテ』の研究に精力的に取り組んできて，研究論文の発表や，日本イスパニヤ学会での口頭発表を重ねて想を練り，本論文の提出に至った。対象となる作品を原典と複数の邦訳によって十分に読み込んだ上で,「『ドン・キホーテ』の作者は読者を愛しており，それゆえ，読者はこの作品の創造に参加させられる」という独創的な見解を提案したことは評価に値する。

学位申請者は，固定観念に囚われない自由な発想が次々に浮かぶ資質に恵まれ，論文の構想を立ててからも，あるいは論文を書き進めるうちにさえ，新たな着想を得て，内容が変化していく。「愛の詩学」というキーワードは，当初は「作者が読者に抱く愛」「作者・読者が作品・主人公に抱く愛」「主人公が自分や他の登場人物に抱く愛」のように広く適用されるはずだったが，最終的には第 1 の事例に限定して用いられることになった。また，本論文では「世界は劇場である」という主張にかかわる考察にかなりの紙数が割かれているが，これは執筆中に大きく発展した部分であり，主題からはやや乖離していると見ることもできる。論展開については，筆が発想の速さに追い付かず，必要な根拠を省いて結論を示している箇所があり，むしろ随筆を思わせる。

しかし，こういった形式的な粗削りな部分があるにもかかわらず，本論文は全体としては単一の方針に貫かれ，野心的で魅力のある内容となっていると言えるだろう。

[論文審査結果]

本論文は６つの章から成り，その前後に「はじめに」と「むすび」が配置されている。「はじめに」では，問題提起および論文の構成の説明を行なう。学位申請者にとって，標題における「愛」とは,「作者が読者に抱く愛」「作者・読者が作品・主人公に抱く愛」を指し,「詩学」とは「創作技法の研究」を指すのだが,「はじめに」では，その説明が十分ではない点が問題であろう。

第 1 章「読者への愛と信頼」，第 2 章「作中の読者たちの役割」，第 3 章「虚構の作者の役割」は「理論編」とされ,『ドン・キホーテ』では読者を作品の創作に加わらせる「詩学（技法)」が採られていることを主張する。その根拠の１つは，この作品はアラビア語で書かれた史書のスペイン語訳にセルバンテスが

手を加えたという体裁をとっている点である。学位申請者は、物語が複数の作者のフィルターを通っていくこの形式に「伝言ゲーム」との類似点を見いだす。さらに，伝言ゲームは原文が存在することが足枷となりゲーム参加者たちの想像の展開が限定的になるのとは対照的に，『ドン・キホーテ』の読者は，複数の作者の向こう側に想定されるものの実在しない人物，いわば「原ドン・キホーテ」がどのようなものであったかをイメージすることによって，作品の解釈の可能性が無限に広がると指摘する。それにより『ドン・キホーテ』を「愛」する読者は作品の創造に積極的に参加することになる。こうした『ドン・キホーテ』の有り様を伝言ゲームになぞらえる着想は興味深いものである。ただし，読者のイメージをドン・キホーテという架空の登場人物のみに向かわせ，『ドン・キホーテ』という，確かに実在するテクスト全体を考慮しない点は，読みの可能性をむしろ矮小化してしまう危険性を孕むのではという懸念が残る。

第 4 章「世界は劇場」，第 5 章「『ドン・キホーテ』第一幕の分析」，第 6 章「『ドン・キホーテ』終幕の分析」は「実践編」とされる。即ち，上記の提言の具体例として，学位申請者自身が読者となって対象作品の創造に加わると，どのような結果が得られるかが示される。ここでは，主人公は果たして狂人だったのか，狂人を演じていたに過ぎないのか，また，主人公の臨終を間近にひかえ，従士サンチョ・パンサ（Sancho Panza）が「どことなくうれしそうにしていた（se regocijaba）」のはなぜかについての１つの解釈を提示する。それぞれ興味深い解釈であり，特に臨終の場面での直接話法・間接話法の比較は優れた指摘である。しかし読者毎に多様な解釈をすることが許容されることは，どういう意義を持つのか，たとえばロマン主義的な解釈と「ドン・キホーテの真意は理想の世界をつくることではなく，現実逃避である」といった否定的な解釈との優劣は問われるのか，といった点が，やや分かりにくい。

「むすび」では，これまでの論旨をふりかえった後，提言の妥当性が改めて強調される。学位申請者の関心は早くも新たな構想に傾いているように見受けられるが，結論の章として，より抑えた筆致が望まれる。

[最終試験結果]

最終試験は，2013 年 2 月 7 日，本学三木記念会館で実施され，福嶌教隆（主査，司会進行），野村竜仁，成田瑞穂の 3 名の本学教員と，穐原三佳 神戸大学非常勤講師が審査にあたった。審査は公開で行なわれ，最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に，各審査委員が論文に対する意見，感想，質問を述べ，申請者が回答するという形式で進められた。

審査員からは，上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ，内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。『愛の詩学』とい

う術語はマエストゥ（Ramiro de Maeztu）の『愛の象徴ドン・キホーテ』（*Don Quijote o el amor*）と関係があるのか，ロペ・デ・ベガ（Lope de Vega）の‘ vulgo ’についての見解を比較に用いるのは適切か，ドン・キホーテが抱く「自己愛」あるいは「自尊心」はどの段階で生じたのか，「自己愛」という術語の定義はフロム（Erich Fromm）に拠るのか，「読者の参加」を認める文学作品は『ドン・キホーテ』以外にはないのか，などについて質疑が交わされた。エラスムス（Erasmus）とセルバンテスの関係，奇知主義（conceptismo）とのかかわり，オルテガ（José Ortega y Gasset）の指摘などについても提言があった。また，たとえ話を用いて分かり易く説明するだけでなく，論拠を示して結論に至る過程を示す必要があるといった助言も行なわれた。

学位申請者は，これらの質問に対して誠実に回答し，主張すべきところは適切に主張し，指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。予定時間を上回る十分な討議を行なって，公開審査は終了した。

公開審査後，４名の審査委員は別室で協議を行なった。本論文は，大きな主題に正面から向き合い，敢えて「愛」という言い尽くされた概念を手がかりに分析し，独創的な結論に至ったこと，今後の自由な着想の萌芽が認められることなどが評価された。

そして，本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士（文学）の学位を授与するに十分な価値があることを審査員全員が認め，最終結果を「合格」とすることに決定した。